

耳鼻・咽喉・口腔

科目責任者 中山次久

学年・学期 3学年・2学期

I. 前 文

耳鼻咽喉、歯、口腔、頸部、気管食道がこの講義の受け持ち領域となります。これらの領域は、人間が生活を送る上で欠くことのできない機能を持ち、形態的にも美しく整った、合目的に造られた器官です。具体的には人の五感のうち聴・嗅・味覚を含むとともに、平衡感覚、呼吸、咀嚼、嚥下などの様々な機能を持ちます。これらの機能を学習する中では、耳鼻咽喉科領域のみならず、例えば咀嚼については、歯科学的知識は欠くことができません。本領域は、元来外科系として生まれ発展しましたが、診断においては内科系の考え、治療においては内科系・外科系の双方の考えが要求されます。手術は顕微鏡下、内視鏡下の微細な手術から、頭頸部手術、形成外科的手術まで必要とされる領域です。また近年では、フレイルあるいは認知症の発症には、感覚器の衰え、特に難聴が重要視され、耳鼻咽喉科医の早期介入の重要性が指摘されています。この領域は小児から高齢者において様々な機能を持つこれらの器官について、最も基本的事項を理解する講義内容です。

II. 担当教員

耳鼻咽喉・頭頸部外科学

中山次久

埼玉医療センター：耳鼻咽喉・頭頸部外科学

田中康広

口腔外科学

川又均

III. 一般学習目標

構造と機能を知ることにより、それらが障害されることによって生じる疾患の理解は、自ずと容易になります。言い換えれば、解剖・生理・病因を理解した医学知識を持っていれば、症状・診断・治療についてもそれ程遠くないところまで到達できるのです。また、耳鼻・咽喉・口腔疾患は、その周辺臓器である脳、眼、気管、食道にまで波及し、常に他科と連携を考慮した知識の習得も重要です。

IV. 学修の到達目標

本領域の専門家を上手に利用できるだけの知識を身につけてほしいと思います。

正しい知識があれば、ためらうことがなく本領域の専門家へのコンサルトが可能となります。

現代医療は細分化された専門家の協力によって成り立ちます。ひとりひとりの中では統合された常識的な知識が必要となります。統合の中で欠落部分が生じないことが、良医の条件です。

V. 授業計画及び方法 * () 内はアクティブラーニングの番号と種類

(1：反転授業の要素を含む授業（知識習得の要素を教室外で済ませ、知識確認等の要素を教室で行う授業形態。)

2：ディスカッション、ディベート 3：グループワーク 4：実習、フィールドワーク 5：プレゼンテーション

6：その他)

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブラーニング
	10	3	木	3	頭頸部腫瘍 I	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 今野 渉	1

回数	月	日	曜日	時限	講 義 テ ー マ	担 当 者	アクティブ ラーニング
1	10	3	木	5	嚥下	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 後藤 一 貴	1
2		4	金	1	耳鼻・咽喉の内視鏡所見	耳鼻咽喉・頭頸部外科 柏木 隆 志	1
3		4	金	2	口腔領域の嚢胞性疾患と炎症性疾患	口 腔 外 科 学 和久井 崇 大	1
4		4	金	3	咽頭外傷・気道狭窄・気管切開	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 平林 秀 樹	1
5		4	金	4	睡眠呼吸障害	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 中島 逸 男	1
6		4	金	5	音声	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 生野 登	1
7		8	火	2	顎・口腔腫瘍（悪性腫瘍Ⅱ）	口 腔 外 科 学 内田 大 亮	1
8		8	火	3	顎変形症と咬合改善術	口 腔 外 科 学 和久井 崇 大	1
9		8	火	4	末梢性顔面神経麻痺	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 柏木 隆 志	1
10		8	火	5	中耳・外耳Ⅰ	埼玉医療センター 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 田中 康 広	1
11		8	火	6	中耳・外耳Ⅱ	埼玉医療センター 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 田中 康 広	1
12		9	水	1	口唇口蓋裂と顎顔面形成外科	口 腔 外 科 学 川 又 均	1
13		9	水	2	口腔内科疾患	口 腔 外 科 学 和久井 崇 大	1
14		9	水	3	非定型顎顔面痛（顎関節疾患，神経疾患）	口 腔 外 科 学 福本 正 知	1
15		9	水	4	口腔顎顔面外傷	口 腔 外 科 学 福本 正 知	1
16		9	水	5	聴覚Ⅰ	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 深 美 悟	1
17		9	水	6	頭頸部腫瘍Ⅱ（唾液腺含む）	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 金谷 洋 明	1
18		10	木	1	顎・口腔腫瘍①（悪性腫瘍Ⅰ）	口 腔 外 科 学 川 又 均	1
19		10	木	2	顎・口腔腫瘍②（良性腫瘍・歯原性腫瘍）	口 腔 外 科 学 川 又 均	1
20		10	木	3	鼻副鼻腔疾患	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 中山 次 久	1
21		10	木	4	鼻アレルギー	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 中山 次 久	1
22		10	木	5	聴覚Ⅱ	埼玉医療センター 耳鼻咽喉・頭頸部外科学 穂吉 亮 平	1
23		10	木	6	平衡Ⅰ	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 添田 一 弘	1
24		10	木	7	平衡Ⅱ	耳鼻咽喉・頭頸部外科学 添田 一 弘	1

VI. 評価基準（成績評価の方法・基準）

講義への出席2/3以上

試験60点以上

講義当日ミニテストを行う場合があります，その結果は総合成績にも反映される。

なお定期試験問題内の英語問題は「医学英語Ⅲ」の評価として集計される。

Ⅶ. 教科書・参考図書・AV資料

「新耳鼻咽喉科学」野村恭也・加我君孝 / 南山堂

日本の代表的耳鼻咽喉科書です。他のものでもよいのですが，この程度の本を一冊持っていてほしいと思います。手慣れた本は医師になってからも辞典的に役に立ちます。小さな本は何を使ってもよく，どれもたいした変わりはありません。

「標準口腔外科学」第4版

野間弘康・瀬戸皖一 / 医学書院

「口腔外科学」第3版

白砂兼光・古郷幹彦 編集 / 医歯薬出版

「口腔科学」

戸塚靖則・高戸毅 監修 / 朝倉書店

Ⅷ. 質問への対応方法

秘書を通じて質問事項を書面にて提出すること。

IX. 卒業認定・学位授与の方針と当該授業科目の関連

*◎：最も重点を置くDP ○：重点を置くDP

ディプロマ・ポリシー（卒業認定・学位授与の方針）		
医学知識	人体の構造と機能、種々の疾患の原因や病態などに関する正しい知識に基づいて臨床推論を行い、他者に説明することができる。	◎
	種々の疾患の診断や治療、予防について原理や特徴を含めて理解し、他者に説明することができる。	
臨床能力	卒後臨床研修において求められる診療技能を身に付け、正しく実践することができる。	
	医療安全や感染防止に配慮した診療を実践することができる。	
プロフェッショナリズム	医師としての良識と倫理観を身に付け、患者やその家族に対して誠意と思いやりのある医療を実践することができる。	○
	医師としてのコミュニケーション能力と協調性を身に付け、患者やその家族、あるいは他の医療従事者と適切な人間関係を構築することができる。	○
能動的学修能力	医師としての内発的モチベーションに基づいて自己研鑽や生涯学修に努めることができる。	○
	書籍や種々の資料、情報通信技術（ICT）などの利用法を理解し、自らの学修に活用することができる。	
リサーチ・マインド	最新の医学情報や医療技術に関心を持ち、専門的議論に参加することができる。	○
	自らも医学や医療の進歩に寄与しようとする意欲を持ち、実践することができる。	
社会的視野	保健医療行政の動向や医師に対する社会ニーズを理解し、自らの行動に反映させることができる。	
	医学や医療をグローバルな視点で捉える国際性を身に付け、自らの行動に反映させることができる。	
人間性	医師に求められる幅広い教養を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	○
	多様な価値観に対応できる豊かな人間性を身に付け、他者との関係においてそれを活かすことができる。	

X. 課題（試験やレポート等）に対するフィードバックの方法

試験の際にレポートを評価、フィードバックします。

XI. 求められる事前学習、事後学習およびそれに必要な時間

シラバス別冊参照。なお、シラバス別冊に記載がない場合、要点を確認しておく事。（所要時間の目安20分）

XII. コアカリ記号・番号

PS-02-16-01

PS-02-16-02

PS-02-16-03

PS-02-16-04

PS-02-16-05